

## 授業方法について独自に工夫していること 【人文社会学系】

グループ分けをして、1班は事前に指導する。

ガバンスコース内に英語を書く練習をするための授業がないため、英作文の授業を行った。ただし、ガバンスコースでは英語の教員の資格は取れないので、将来何らかの役に立つようにと考えて、電子メールを書くという実用面を重視した授業を行った。

受講者自身に問いが浮かび、授業内で解決できる循環が生まれるように工夫している。

英語文学の授業で敬遠されがちな精読に重点を置き、言葉のリズムや意味の複数性、語りの技巧等に対する学生の「気付き」を大切にしている。また、同じテーマや対象が、異なる作家によってどう表象されるかを体感し、考えることができるような教材を工夫している。

独自に作成したハンドアウトの配布。

レポートはフィードバックをした後、修正させて、再度提出させている。学生の発表により授業を進めている。

教科書の内容にプラスアルファの知識が身につくようにプリント教材を準備している。

日本語や英語から見て異質な言語であるロシア語の学習をとおして外国語学習に何が有効かを改めて考えてもらえるようにした。また、せっかく学習した初習外国語の知識を整理し、発表してもらうことでさまざまな外国語の特徴について知識として得られるようにした。

学生は教員の指定したリストから発表論文を選ぶ形式のため、論文リストの選択と発表時における疑問点の説明に工夫した。

今年度の「3503241」の方の試みとして、10回程度ミニレポート提出の機会を設け、学生がそれぞれ出す回数を選択して提出し、かつ毎回すぐに採点・返却し授業の中で発表させることで還元するという形式を用いてみた。学生としては、一種の「点取りゲーム」(積極的に参加することで、点数をかせぐのが可視化)的に参加できたようで、課外学習時間をふやし、かつ楽しんで参加できたようだった。

グループ発表形式にし、発表グループは事前に話し合い各自担当個所を準備し、ハンドアウトを作成し、それに従って発表する。準備の段階で、作品を表面的に読むのではなく、その背景を踏まえつつ独自の解釈をすることを求めた。発表後、質疑応答時間を設け、他の学生と疑問点等を議論し、さらに深く内容を理解し合う等、積極的に授業参加する形式にしている。

毎回、学生に関連する論文を読んでこさせて、発表させる。それに基づいて、全員で議論し、次回までに行うべきことを明確にする。

漢文の読解力、理解力向上を目的とする授業なので、たとえ難しい文章であっても、演習形式による受講生との個々のやりとりの中で受講生自身が正解へとたどりつけるよう努力している。

事前に資料と課題を与え、自分の考えを準備して授業に臨むよう指示している。  
授業の時にはできるだけ教員からの一方的な話を避け、学生に問いを投げかけて学生自身が討論して考えをまとめるという進め方で進めている。

演習の場合には、発表担当の学生と、必ず事前の打ち合わせをしている。

本授業は演習形式の授業である。学生は自らの課題について調査・考察したことを、他の学生や教員の前で発表し、それについて意見交換・議論を行うという形で進めていくものである。ただ、その場合、発表担当になった学生はその授業に積極的に参加することにはなるが、発表を担当しない聴衆側の学生の場合、積極的に参加する意欲がないと、授業時間のあいだ席に座って漫然と過ごすことになりかねない。特に本授業は受講者数が非常に多いため、意見交換や議論において発言を自主的なままで任せてしまうと、発言しない学生ばかりが増えてしまうことになる。  
そこで、本演習では「シンポジウム」形式を取り、発表者(複数名)をパネリストとして扱い、毎回「討論者」を決め、その討論者は必ず発言させるようにした。そして、受講者の全員が発表者と討論者をそれぞれ1回ずつは引き受けるように割り振り、積極的に授業に参加する環境作りをした上で、演習を行った。もちろん、討論者以外の発言も(時間の許す限り)許容した。  
このやり方は概ね成功したが、自分の発表日に欠席する学生が多く、限られた授業時間数の中で全員に発表させることが容易ではなかった。

(1)(2)(3)全てに通じて、必ず学生からのリフレクション・意見シートを書かせ、次の時間に反映させるようにしている。

学生のリアクションペーパーに対して毎週、返答を書いて、返却しています。学生の理解の不備、質問などに回答します。多くの人に聞かれた質問、興味深い質問は、次回授業で取り上げ、教室全体で理解を深めるようにしています。

一般的なレクチャーにおいて配慮すべきことを超える、特記すべき工夫はできていないと評価している。

学生が受け身にならないように、授業はグループで調べ議論することを中心に進めた。また、次回の授業までに読むべき教材を配り予習を課した。

全15コマの授業にて、前半7コマは基本知識の習得および整理に焦点を当てる。8コマ目が中間テスト。後半7コマは社会背景および構造要因の説明に集中し、うち1コマは学生間でのディスカッションとショートプレゼンテーションに当てた。

学生が高校まで親しんできた「感想文」とアカデミックライティングの違いについて学ぶ時間を多めにとり、本授業のみならず今後のレポートや卒業論文に対応できるようにしている。  
毎回コメントシートを書いてもらうことで、授業に対する学生の意見、批判、質問などを確認し、翌週以降の授業に反映させている。また発表者に対する質問が出にくいので、発表者への質問、発表内容の評価をまとめるグループワークをさせ、それを授業内で共有するようにしている。

直近の新聞記事を導入で使用し、関心を引くようにしている。

概説Ⅱについては毎回、講義内容を要約したプリントを配っている。  
演習については教育実習を意識させるために担当者に板書することを求めている。

パワーポイント使用し、グラフや図、動画などを多用してわかりやすく授業内容を提示した。  
できるだけ最新の研究成果を題材とした。

音声学については、授業内容の性質から、受講生には授業外での課題をできる限り課し、併せて、教員からは、個々人の内容に対応したフィードバックをするようにしています。また、口の中の動きについては、視覚的に理解しやすいように、映像を適宜用いています。  
英語学演習については、卒論に取り掛かるうえで必要となるデータ分析の知識・技能を身につける必要がありますので、実際にパソコンを用いてその演習を行っています。また、レポートもその形態に近いものにしていきます。

当り前のことであるが、1回の講義で扱える(学生にとって受容できる)内容は、教員が思っているよりも少ないものであるから、まず扱う題材(根拠と論理によって説明しようとするもの)をセレクトし整理して、聴講する側にわかりやすくするよう努力することである。

英語文学の講義科目であることを念頭に、最初に大まかなポイントおよび歴史的背景を英語で説明し、それを踏まえて個別の文学作品の分析や解釈については、英語と日本語を交えて学生の理解を見ながら講義を行っている。これにより、英語の四技能のうち、読むことに偏りがちな文学の授業で英語を聴く機会を増やすことができる。また、必要に応じて学生間の意見交換、グループ討議の時間を設け、一方的な講義にならないように心掛けることで、アクティヴ・ラーニングにも資すると考える。

日本語教師の資質・能力の基礎を養成するために、教育実習を取り入れた。この教育実習は学生が教師役と学習者役になって行う模擬授業である。初級の日本語教科書の12課を教科書分析に基づき、学生主導で模擬授業を計画して、実施した。ここでは、模擬授業実施後に、ディスカッション、フィードバックシート、省察、レポート等、多くの振り返りの機会を設けた。この振り返りにより、非熟練教師である学生が自身の良い点や改善点に気づくことができるようにした。